

三位一体の主日

第一朗読 出エジプト 34・4b-6、8-9
第二朗読 ニコリント 13・11-13
福音朗読 ヨハネ 3・16-18

2026.5.31

カトリック高円寺教会 9:30

主任司祭 高木健次神父

今朗読されました福音の最初の言葉、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」、これはキリスト教全体のエッセンスを言い表している言葉とすることができます。ですから、色々な機会に——今日、ミサの中で聖書朗読が巡ってきたときだけではなく——、色々な機会にこの御言葉をわたしたちは思い起こして、教会生活の中で聞くという機会が多いと思うんです。

キリスト教の一番出発点は、神様によってわたしたちが愛されているということですが、ここで注意していただきたいのがこの「世」という単語です。ヨハネの福音書の中で、「世」という言葉は、神様によって造られた世界全体をなんとなく表しているということよりは、神との関係を断ち切っている、そういう人類を中心とした神と切り離された世界っていう、そういうような意味合いを持っているわけです。ちなみに、それが個人のレベルで言うならばそれは「肉」という表現になって、その肉が合わさると「世」というふうになるわけなんですけども、つまりは、ここでは、神と切り離されている、あるいは自ら切り離している、そういうような者たちに対して神様の方からすべてをお与えになるほど愛されているということの宣言なわけです。

ところが、わたしたちは、それほどの神様の愛をいつも宣言しているというか信じているわけなんですけども、体験として神に愛されている、神様の愛を本当に感じたという瞬間があるかっていうふうに問うならば、なかなかそういう体験がないという思いに駆られるというか、あるいは四六時中その神様の愛をいつも感じているわけではないというところが実のところなのではないかなと思うんです。

このことには二つの理由が考えられます。

一つは、わたしたちがあまりにも神の愛の中に全面的に生きているので、これが神の愛でこれは神の愛じゃない、そういうような個別的な切り離された体験として感じ

る機会がない。でも全体として。高円寺教会にも昔いらっしゃった佐久間神父さんがお作りになった典礼聖歌（典礼聖歌 170 番）にもあります。「わたしたちは魚のよう、神様の愛の中で泳ぐ」って。これは、元々はシエナのカタリナっていう中世のイタリアの聖人の言葉から採られてますけど、魚が「水があってありがたいな」って意識しないように——その中で生きてるから、水があるのが当たり前と思って——でもその中で生かされているように。わたしたちの場合だったら空気かもしれませんが、呼吸するたび毎に空気を感じているわけではない。しかし確かにそれによって生かされているっていう意味で、神様の愛そのものの中にいる。

で、それは、わたしたちが感じているとか意識することができるということに神の愛は依存しないのだということのを思い起こさないと、わたしたちが感じるができないから神の愛はないんだっていう結論に達してしまうのは間違いなわけです。神様の愛というのは、わたしたちが感じるか感じないかに依存しない。そっちの方が主ではないのだと。確かにそこにある。だから、感じないときでもそれを信じるし、自分に言い聞かせるということが、ある意味では信仰——わたしたちは神様の愛の中にいるのだ、たとえ自分が感じるができない瞬間であっても、と言いきかせ続けるというのが一つの信仰生活、信仰ということになると思うんです。

で、もう一つ、神の愛を感じられないのは、探している場所が違うっていうか、思っているイメージが違うからです。それはある意味で神と切り離された「世」あるいは「肉」っていうことの中で愛や恵みを捉えてしまうので、どうしても自分にとって都合がいいことが起こるとか、神様と関係なくこの世のこの切り離された状態の中で起こる色々な出来事を通して何事かを感じようとしているからっていうことがあります。でも神の愛っていうのは、神様がご自分のすべてをお渡しになる、わたしたちにいただくっていうことは、「神は愛である」って出てきますけど、その神様の愛をわたしたちにくださるということなので、愛を受けているっていうのは、何か感情的な高揚——その時もあるかもしれませんが——とか、あるいは良い出来事、自分にとって好ましい出来事が起こるとかということよりも——というか、ではなくと言っていいかもしれませんが——、わたしたちの中に他の人を思い遣る、あるいは他の人のための場所が心の中にある、それは他の誰かのために自分の時間や大切なことを用いようとする、そういう時に、実は神の愛がわたしたちの中にあるという瞬間です。そこまでじゃなくても、ある場合によっては、今はいろんな報道とかで世界の直

接出会ったことがない人たちの苦勞とかを思い遣ることができる、そういう出来事に心を痛めたりする。そのことそのものが神の愛を受けているしるしなんだということなんです。

今日、三位一体の祭日をお祝いしてますが、三位一体——唯一の神様は父と子と聖霊としていらっしゃるという——それは理解しようとする哲学的な概念や教義というよりは、そこに招かれている神様の体験への招きなんだと捉える方が良いと思います。父と子と聖霊は互いに相手にご自分の全てを渡すっていうその関係の中に、それがすべての出発があるのだ。わたしたちも自分の中に全部を取り込もうとするのではなくて、自分を他の誰かに渡そうと、あるいは自分の時間や心の場所を他の人のために空けようとする、そのことがまさに三位一体の体験を——もちろん部分的ではあるけれども——そこに与えられているということができるわけです。わたしたちは更に、もっともっとその三位一体の本当に完全に一致するっていうその交わりへと招かれるほどに、聖霊の恵みを頂いていると信じています。

今日、色々な形でわたしたちのために自分の何かを——もちろんその一番出発にはイエス様の生き方があるわけですけど——自分のためにいろんな形で時間や心を砕いたり向けてくれている周りの人たちを通して示される神様の姿、そして自分の中にある他の人のために何かしたい、心に向けるっていう自分の中に注がれている神の愛に特に思いを寄せながら、感謝のうちに、そしてもっと繋がりが深まっていくことができるように恵みを願い続ける、その思いを新たにして、このごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>